第86号
昭和58年7月25日

内　容
故上代たの先生追悼
記念特集号

現代の婦人問題と女子教育…… 1
故上代たの先生追悼記念会…… 2
思い出を語る……3～5
第123回大学共同セミナー…… 6
法人ニュース……7～8
ハウス周辺の
“歴史散歩”のすすめ……11

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発　行
財団法人　大学セミナー・ハウス
＜所在地＞
東京都八王子市下柚木（〒192-03）
電　話　0426-76-8511～3
振替口座　東京 5-74590番
編　集
大学セミナー・ハウス
企画室
編集人　中川秀恭
発行人　吉川孔敏
製作　中央公論事業出版

故上代たの先生追悼記念セミナー
発題講演から

現代の婦人問題と女子教育

日本女子大学教授
一番ヶ瀬　康子

戦争と平和の問題は、戦争の犠牲になる人の目で考えることが大切です。私の専門は社会福祉ですが、社会福祉の歴史を調べてみますと、いかに福祉と戦争が矛盾するものかよくわかります。戦争が始まると、〝バターか大砲か〟といった問題がおきて、必ず福祉が犠牲にされます。平和は社会福祉にとっても、また婦人解放にとっても不可欠の条件です。私はこのような観点から第一に、平和問題と婦人との関係、第二に、婦人問題を含めた婦人解放の現代的動向、第三に、婦人解放の意味、について考えてみたいと思います。

まず、平和と婦人の関係について、次の二つのことを申し上げたい。市川房枝先生は、もし婦人に参政権があったら戦争はこんなに深刻になっただろうか、あるいは戦争は勃発していただろうか、といわれました。また上代たの先生が私淑されたジェーン・アダムスは「スラムに住む隣人たちと同じく世界の隣人たちに平和を」と主張しています。また、ノーベル平和賞のアルバ・ミュルダールは「差別のあるところに真の平和はない」と発言しています。つまり、差別と戦争、平等と平和は、裏表の関係にあるのではないでしょうか。

「国際婦人年」は、平和を守り続けるために差別があってはならない、すべての人々に人権が保障されなければ真の平和は生まれない、という世界人権宣言を具体化していく努力の一つとして決められたものです。平等・発展・平和がスローガンに掲げられ、向こう一〇年間積極的に運動を進めていくことになりましたが、その中間にあたる一九八〇年には、婦人に対するあらゆる差別の撤廃に関する条約が出され、わが国もこれに調印しています。

差別撤廃条約のめざすものは、次の三つの点で従来の婦人解放運動と異なっています。第一に、婦人解放運動の成果を人権の問題として統合的に捉えていること。第二に、単に基本的人権を保障せよというスローガンや宣言にとどまらず、具体的にそのあり方を探求していること。たとえば、差別撤廃のための女子教育のあり方にまでかなり細かく言及しています。第三に、性別役割分業の撤廃というこれまでになかったラジカルな提案をしていること。それまでの婦人解放運動は男女平等や母性保護を提案してきましたが、それをより一層明確にしたかたちで、夫は会社へ、妻は家庭にとか、男性と女性の役割を区別するような考え方をやめるべきであると提起している点は注目に値します。なぜなら、確かに市川先生のいわれたように女性に参政権があったら戦争を防止できたかもしれませんが、もし女性がしかるべき教育を受けていなかったとしたら、また社会に参加し発言しなかったら、逆に戦争を拡大させるかもしれないのです。私は、人権というものを教育を含めて、総合的に捉え、さらに性別役割分業の撤廃を提起していることの意味は、まことに大きいと思います。

ところで、わが国の婦人運動の現状はというと、残念ながら十分にこの方向に動いていないように思います。婦人解放の中心は労働問題ですが、わが国では婦人労働者に対する差別が、きわめて大きく残っています。たとえば、製造業部門における男子の賃金を100とすると女子の賃金は53くらいです。その差は世界的に見て大きいほうです。また高齢期の婦人に対する差別はいろいろな影を落としています。日本の六〇歳以上の婦人の自殺率は、残念ながら世界で一位か二位です。その背景に、年金問題や住宅問題などがあるとしても、根源をたどれば、女性に人間として生き抜く力を身につけさせてこなかった教育の問題に突き当たります。このように男女差別の問題と教育問題は密接に関係しています。ことに日本では家庭科教育にその矛盾があらわれています。現在高等学校の家庭科は、女子が必修、男子は選択ということになっていますが、本来家庭を形成するのは夫と妻、父と母、男女両性であるべきなのですから、男女共に家庭科教育の機会を与えるべきではないでしょうか。

最後に、なぜ私たちは婦人解放を積極的に主張しなければならないのでしょうか。J・S・ミルは『女性の解放』という本のなかで、男性が女性を本性において劣っていると思い込むことは、男性にとっても堕落につながると述べています。この指摘は、障害者問題にもあてはまります。障害者は自分より劣っているという偏見を持つことによっていわゆる健常者は傲慢になります。つまり、ミルは人類の半数を占める女性を差別することは、人類社会の発展にとって大きなマイナスであると主張しているのです。

日本ではいまもなお、婦人の社会参加の機会が制限され、公の組織の人事登用などに際しても、女性は冷遇されています。こうした差別状況を打ち破っていくためには、婦人自身が力をつけていかなければならないでしょう。そういう意味で女子教育は、女性の能力を引き出すとともに、女性解放さらには真の平和のための主体形成の機会にもならなければならないでしょう。

（文責・編集者）

故上代たの先生追悼記念会

――「平和・婦人・学問」をテーマとする共同セミナーを捧げて――

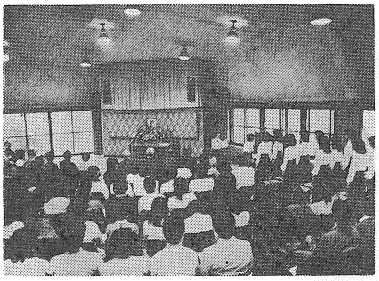
昭和58年5月29日

当ハウス創立の理念に共鳴して設立に尽力された故上代たの先生が逝去されてから、一年の月日が経過した。

先生は別掲の〈ハウスとの関係〉にあるように、昭和34年1月18日、大学セミナー・ハウスの構想を飯田宗一郎氏（現名誉館長）からはじめて聞き、同氏のビジョン実現に大いなる声援をおくられ、創設期の参画者として終始、協力を惜しまれなかった。

先生の一周忌に当たり、教育と学問の視点に立って先生を追悼するため、第123回大学共同セミナー「平和・婦人・学問――現代人へのメッセージ――」が企画され、セミナーの一部として会期二日目の5月29日に追悼記念会が催された。

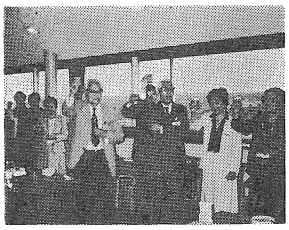
時は新緑の5月、さわやかな風が流れる多摩の丘に、故上代先生の母校・日本女子大学を中心として、先生のご生前に親交のあった方々やハウスの関係者、共同セミナーの指導教授と参加学生の総勢一五〇人が集い、先生の人と業績を偲んだ。



日本女子大学合唱団のコーラスが流れる会場風景（講堂）

第一部・追悼の集いは、正面に故上代先生の遺影と生花が飾られた講堂で行なわれた。日本女子大学四年生の山田裕子さんのピアノによる奏楽、バッハの「主よ、人の望みよ　喜びよ」で開会したプログラムは、日本女子大学教授・徳末愛子氏の司会で厳かに、しかも心温まる雰囲気の中に進行した。

まず、当ハウスの中川理事長の開会挨拶があり、つづいて日本女子大学学長・青木生子、法政大学教授で世界平和アピール七人委員会事務局長・内山尚三、NHK解説委員・東浦めい、教え子を代表して慶応義塾大学教授・三浦冨美子、当ハウス名誉館長・飯田宗一郎の諸氏より追悼のメッセージが述べられた。ゲストの五氏は故上代先生との出会いを、それぞれの生き方や仕事を通じて表現され、参列者に深い感動を与えた（要旨は3～5ページに別掲）。



交歓パーティー（交友館）
正面左は乾杯の音頭をとる
高橋源次氏

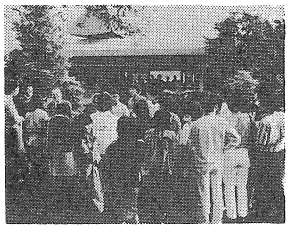
ゲストのメッセージの合間には、故上代先生が生前、目をかけて温かく見守っておられた日本女子大学合唱団による美しいコーラスを鑑賞した。「O'Lord! Correct Me」は先生が愛唱された讃美歌であり、「ねむの花」は合唱団のレパートリーの中で最もお好きな曲であった。

次に、先生が昭和50年、この八王子の丘で学生に語りかけられた講演「婦人と平和について」の一部を録音テープで聞いた。婦人による平和のための国際会議の発足の経緯、人類の将来に及ぼす核兵器の脅威に触れたこのテープは、まさにわれわれ現代人に残された先生の遺言であった。

最後に参列者全員が「また会う日まで」を先生への哀惜の心と平和への祈りをこめて合唱し、第一部の幕を閉じた。

◇

第二部の交歓パーティーは交友館に会場を移し、元明治学院大学学長・高橋源次氏の乾杯で開宴となった。梅雨のはしりで天候が定まらない一日であったが、幸いにも晴れ間がのぞき、交友館の前庭は共同セミナーの討論が再燃して、先生と学生たちとの輪が広がり、いつまでもつづいていた。



交歓パーティー（交友館前庭）
談論の輪

◇

当日の受付には日本女子大学図書館友の会の方々の応援をいただいたこと、また開催に当たって日本女子大学のご協力があり、とりわけ企画の段階から故上代先生の教え子で、ハウス開館当初からの関係者である徳末愛子氏と、共同セミナー委員の熊坂敦子氏のお二人が運営全般の労をとって下さったことを感謝をもって記しておきたい。

〔主なる来賓〕（敬称略）

青木生子、飯田宗一郎、石田雄、一番ヶ瀬康子、井出義光、井出祥子、内山尚三、岡本栄一、小俣喜久治、小野房子、岡野加穂留・同夫人、亀井規子、北村幸子、桐生冨久、北野美枝子、熊坂敦子、黒田道雄、合田信子、牛頭栄子、佐藤共子、坂本富美子、田宮良子、高橋源次、田中礼子、土田美芳、辻キヨ、徳末愛子、土井恵美子、中山喜美子、布川角左衛門・同夫人、東浦めい、藤本紘、松本武子、松浦正已、三浦冨美子、三輪英夫、山口武義、矢内喜久子、吉田幸弘、吉田美穂子、鈴木千歳、中村尚子、芳山邦弘ほか。

記念撮影
上代先生の遺影の前で

お茶席でくつろぐ（交友館）
―矢内宗紫社中のご奉仕で―

プログラム

5月29日（日）

受付開始（14時）……交友館

◇**第一部　追悼の集い**（15時）……講堂

司会　日本女子大学教授　徳末愛子
奏楽・ピアノ　日本女子大学四年　山田裕子
挨拶　当ハウス理事長　中川秀恭
思い出を語る〈1〉　日本女子大学学長　青木生子
法政大学教授　内山尚三
NHK解説委員　東浦めい
合唱　日本女子大学合唱団
O'Lord! Correct Me
ねむの花
思い出を語る〈2〉　慶応義塾大学教授　三浦冨美子
当ハウス名誉館長　飯田宗一郎
故人は語る―録音テープから―
合唱　全員
また会う日まで

第二部　交歓パーティー（16時半）……交友館・前庭

乾杯　元明治学院大学学長　高橋源次

思い出を語る
追悼メッセージから

日本女子大学学長
青木　生子

私が日本女子大学で教鞭をとり始めたころ、上代先生から「私は成瀬先生との間に〝黙契〟があるのだ」とうかがったことがあります。上代先生が、限りない恩愛と人生の根本的指導を受けた方に、成瀬仁蔵と新渡戸稲造のお二人がおられたことは特筆されねばなりません。

先生は学生時代から新渡戸邸に頻繁に出入りし、図書や手紙の整理を手伝い、卒業後は新渡戸博士のつてでアメリカに四年間留学されました。大正6年に帰国後、日本女子大の教授となり、アメリカ文学の講義を始められたのでした。その頃、博士は東京女子大学創立のために尽力され、それを手伝ってほしいと上代先生に懇請された。去就に迷い、先生は成瀬先生に直接相談をもちかけられた。そのとき成瀬先生は「それはあなた自身で決めることだな」とおっしゃるだけでした。上代先生はついに母校に残る意志を固め、悲痛な思いで新渡戸邸を訪れ、言い出しかねてただ黙していると、博士は「わかったよ、母校のために尽くしなさい」の一言を与えられました。

先生は、新渡戸先生の底知れぬ寛大さに感泣するとともに、全力を母校に捧げていくことが新渡戸先生に対するご恩返しであると決心なさった。母校に帰り、このことをご報告したとき、成瀬先生はただ、「うん、うん」とおっしゃるだけであった。上代先生は次のように記しておられます。

「私は、よく自分の母校と（新渡戸）先生の創立された東京女子大学とを何となく一つものに考え、その進展をいのるものであるが、何時も私の心には新渡戸先生と成瀬仁蔵先生とのお二人の間にかわされた『無言劇』の場面が浮ぶ」（『新渡戸博士追憶集』から）。

私は、上代先生の感じとったこの深い意味の無言劇の中に、新渡戸先生の恩愛への感謝と、母校に生涯を捧げるという成瀬先生との黙契が成り立ったのではないか、と推察するのです。若き日の上代先生にとり、成瀬仁蔵と新渡戸稲造との、それぞれはなんと素晴らしい出会いであり、あえて申すなら、この三角関係は人生の感動的な、それこそ無言劇としか言いようがありません。

ひたすら敬慕申し上げる上代先生が、ひょっとしたら日本女子大学ではなく、東京女子大学の学長であったかもしれなくともよい、と思えるような、そんな先生であることをむしろ誇りにすらしています。国立、公立、私立の大学間の壁をはずし、学生と教授との人格的接触を図ることを目的とするこの大学セミナー・ハウスに、大変な肩入れをなさったのも上代先生なら当然のこと。限りなく目を広げ、世界平和をアピールする先生は、一方でごく身近の学生や私たちに人生の大先達としての温かい励ましと、鋭い知性に富んだお言葉と視線をたえず配ることを忘れなかった。それを受けた者は、人生への挑戦に立ち向かう勇気をどうしても起こさざるを得なくされてしまうのです。

その不思議な魅力こそ、先生が真に偉大な指導者、教育者でいらした所以と思います。女子大の重責を担うことになった私に、先生がたった一言おっしゃった。「青木さん、いちばん大切なこと、それは学生を愛することです。これだけをあなたに伝えておきたかった」。

（文責・編集者）

法政大学教授
内山　尚三

私は、世界平和アピール七人委員会の事務局を二四年間つとめてまいりました。私の前の事務局長が、一九五九年、ダライ・ラマの問題で独走したことに対して、湯川秀樹先生が非常に怒って、「この委員会は解散すべきだ」と記者会見で述べられたことがありました。七人委員会を提唱した平凡社の前社長・下中弥三郎氏に相談をもちかけたところ、会合を開くから出席して下さいと頼んでほしいといわれて、私が諸先生を訪問することになりました。当時の男性のメンバーは、下中、湯川、前田多門、茅誠司の四人の先生方でありました。男性方は、解散したほうがよいといわれ、それから私は上代先生にお目にかかったのです。

私が用件を申し上げたところ、「こんなことで解散するとは……。平和というものを守っていくのは大変なことなんですよ。男性はダメね」と言われた。その後、平塚らいてう、植村環両先生を訪問してご意見をうかがったところ、「解散すべきではない」ということでした。私は、上代先生の「男性はダメね」という言葉を聞いて、大変ショックを受けた。その時、私はまだ三九歳で感受性の強い年頃でしたから（笑）、母親ならぬ女性コンプレックスに悩まされて今日に至っています。

私の専門は民法学、法社会学ですので、七人委員会が取り上げる国際政治や核を問題とする物理学は研究しておりませんから、アピールを出す時は大変苦労しました。それから一〇年後、大学紛争の真最中に学部長を引き受ける羽目となり、七人委の活動と両立しないので、上代先生にお願いして事務局長を辞めることを認めていただきたいと申し上げた。そのとき上代先生は「私が死ぬまでやってほしい」といわれたのです。先生からこれほどまでに信頼されているのかと、私は感激しました。

私は昨年7月下旬から3月上旬までアメリカへ行っておりましたが、途中で中曽根総理の不沈空母という言葉を耳にしたとき、最初に頭に浮かんだのは、上代先生がご健在であったら、さっそく国際電話がかかってくるだろうということでした。なぜなら先生は、七人委のメンバーの先生方にときどき長い電話をして、説得をされていたからです。たとえば昭和46年、中国代表権問題が国連総会で取り上げられた際、逆重要事項指定方式をとろうとする政府に対して、七人委員会は考え直してほしいという要望書を出すことにした

大学セミナー・ハウスとの関係

昭和34年1月18日　日本女子大学学長室で飯田宗一郎氏の来訪を受け、大学セミナー・ハウスの構想をきく。

同年11月25日　ハウス建設の具体化を協議する初会合に同志の一人として出席（於・四谷の福田家）。

36年11月30日　財団法人大学セミナー・ハウス設立発起人会に出席（於・日本工業倶楽部）。

37年9月19日　大学セミナー・ハウス建設後援会に出席（於・東大懐徳館）。

38年11月2日　地鎮祭に出席し、はじめて多摩丘陵の現在地に立つ。

39年12月3日　第2回「先人に学ぶ講演会」で挨拶（於・日本女子大学成瀬記念講堂）。

40年7月5日　開館式に出席。

43年7月26日　開館三周年記念パーティーにおいて、八二歳の長寿の祝いとして、構内に「上代池」を贈呈さる。

50年11月21日　第81回大学共同セミナー「今日の婦人問題――平等・発展・平和――」でゲスト講演「婦人と平和について」を行なう。

53年3月27日　日本女子大学図書館友の会会員二〇名と来館し、構内を廻歩。これが多摩の丘を訪れた最後となった。

57年4月8日　逝去。95歳。

のでしたが、消極的な茅先生に上代先生が三〇分以上も電話をされ、やっと中国問題について声明を出すことができたのです。

同じことは被爆者援護法の制定をめぐってもありました。七人委員会が中心となって発起人をつのり、三〇〇ほどの署名を集めて厚生大臣に持っていくことになったが、上代先生の他は誰も都合がつかない。先生からの電話を受けた朝永振一郎先生は、「これについては勉強していないので、今回は勘弁してほしい」と言われたが、先生は絶対に聞き入れない。とうとう朝永先生は承知されて一緒に行き、記者会見をなさったのでした。

このように上代先生には「男はダメね」という先入観があったので、東大の総長であろうとノーベル物理学の受賞者であろうと容赦なく自分の見解を述べられた。今日ここに若い女性の方々が多数参加されていますが、平和を守るために「男はダメね」という先生のお言葉を肝に銘じて忘れないでいただきたいと思います。若い男性の方々は、天国の上代先生が明治・大正生まれはダメだけど、昭和生まれは立派だと言われるように、平和問題に大いに取り組んでいただきたいと思います。

(文責・編集者)

NHK解説委員
東浦 めい

私はNHKに入社して三〇年以上になります。この間、何千人、何万人という大勢の方々にお目にかかった。中には非常に頻繁にお会いする方もあるし、また瞬時で別れてしまう方もあります。

私が上代先生にはじめてお目にかかったのは婦人国際平和自由連盟の大会を取材したときでしたから、比較的最近のことであります。以前、米国に行ったとき、その折々に「タノ・ジョウダイはどうしているか」という声をあちこちで聞きましたが、幸か不幸か、私は東京女子大の卒業生であったので、先生を積極的に知ろうという意欲をもたないままにきてしまいました。生きておられるうちに、もう一回お目にかかっておかなければ、という気持が私を先生のところへかりたてた。私はあまり学校に出入りしないような変な学生だったので、「もし、先生が東京女子大の学長になられていたら、おそらく私は先生のところにこんなに親しげに伺うことはできなかったでしょう。かえってよかったですね」と申し上げると、「人間なんてそういうものです」とおっしゃった。

去年の今頃、成瀬講堂で先生と最後のお別れをした帰りのバスの中でのことです。明らかにたいへん重症な知恵遅れとわかる体の大きなお子さんを連れたご婦人が乗ってこられた。体もかなり不自由なお嬢さんのために私は席を譲った。そのお母さんは、私の顔を見て、「NHKの東浦さんでしょう? 実はこの子も上代先生にとても可愛がっていただいたので、最後のお別れに来たのです」と言われた。私はそのとき、上代先生が亡くなられてから、また一つ先生の新しい発見をさせていただいたのでした。

あるとき、私は、米国の婦人の歴史に関するかなり大きな本を一生懸命に翻訳して、先生に見ていただいたことがあります。先生は、「あなたにやってもらいたかったことの一つが、こういうことなのですよ」とおっしゃった。それは一つで、あといくつあるのか恐ろしくて、伺わずにしまったのですが、その本には、米国のクエーカー教徒で奴隷解放を闘ったグリュムケ姉妹や、婦人解放のアンナ・ディキンソンといった女性たちのことが書かれています。上代先生もクエーカー教徒でいらしたわけですが、そのグリュムケ姉妹の晩年の写真が先生とたいへんよく似ており、私はときどき、その写真と上代先生とをダブらせながら、今でもちょっと駆けていけば、代々木に先生がおられるような気がしているのです。

最後にお宅に伺ったとき、先生は外国の友人に宛てて二〇〇枚というたいへんな数の、平和アピールのクリスマス・カードを一枚一枚、ご自分の手で書いておられた。このお姿を、先生の住んでおられたアパートのイメージから拭い去ることができません。先生はまだ私たちの心にいきいきと生きていらっしゃるのです。

(文責・編集者)

慶応義塾大学教授
三浦冨美子

私は、上代先生の思い出を次の四点からお話したいと思います。

第一は先生との出会いです。昭和21年の春、私は日本女子大学ではじめて先生にお会いしました。戦争が敗北し、それに続いた混乱のさなかのことでした。私はその前年の8月に長崎で原爆を体験し、多くの友人・知人の死を目撃して、精神的な傷痕がまだ癒えていない状態でありました。先生は英文科の主任でいらして、私たち新入りの学生にアメリカ詩の講読をして下さいました。

思い出の第二は英文科教授としての先生です。当時は洋書など手に入るすべもなく、先生はワラ半紙に謄写版刷りで詩のアンソロジーを私たちのために編んで下さいました。たしか第一編はロングフェローの『A Psalm of Life』だったかと思います。『汝、塵なれば塵にかえる』、このことは魂について言われたのではない」という一節、「もの言わず、追われてゆく家畜のようになるな、戦いの英雄であれ」という一節、「さあ、立ち上がり行動しよう、どんな運命にも立ち向かう勇気をもって」という結びの一節。この詩を先生は力強く、一人一人の心の襞の中にしみ入るように朗読して下さったのであります。先生とともに読んだ詩の数篇が、当時の私に新しい目覚めのようなものを与えてくれたのです。今から思えば先生の授業は、英語の修得とか詩の形式とかを越えた人間の生きる姿勢そのものを感じさせるものでありました。

第三は、学長時代の先生の個人的側面であります。当時の私は日本女子大で教鞭をとっており、学長の外国文書の作成および整理の手伝いをしておりましたので、先生の個人的なお考えを拝聴することのできる機会を得ました。先生が常に言っておられた三つの言葉をあげたいと思います。一つは、手紙をもらえば必ずすぐに返事を書くこと、二つは姑息なことをしてはいけない、三つは、自分で何でもかんでもやろうと思わないで、自由に動く手足をもつこと、でありました。先生は、単なる要領の良さ、即効的な処世術を超えた、正直で誠実な生きる姿勢をも大事になさったのです。この〝を〟ということは、先生の第三の言葉と関連しています。効率性が求められている現代社会においては、一人の誠実な生き方、行動、努力は、第三者のそれを通すとき、さらに発展し、大きな効果を得ることを可能にします。先生が私に何気なくおっしゃった言葉の現代的意義を見出してはっとするのです。

最後に、先生の思想が私の生き方に大きく影響していることを申し上げたいと思います。今日の社会で、婦人は職業か家庭かという二者選択をせまられることは少なくなっています。しかし無責任なマスコミや世間の風潮は、婦人が家庭をあとにして外に出れば自立が得られる、というような短絡的な考えをもたらしているのではないでしょうか。まず、自分の足元を見つめ、姑息な生き方をしないことが大切であります。そうしてこそ、はじめて婦人の解放を叫ぶことができ、また世界の平和を叫んで、その実現への一歩を刻むこ

とができるのであります。先生のこの点に関するお考えを、先生が昔、アメリカ留学からご帰国になって発表された『祖国の秋へ』と題する一文から引用して、私の思い出を終りたいと思います。

（引用省略）

（文責・編集者）

大学セミナー・ハウス名誉館長

飯田宗一郎

郷里の島根から新橋まで出てくるのに三日かかった、そういう時代の学生であったことをぬきにして、上代先生という一人の女性の評価は成り立たない。そして、私はなんとうまい具合に、よき師・よき友としての上代先生と出会ったことか、と思うのであります。

私はよく、セミナー・ハウスについて、どこかの国にモデルがあるのですか、といった質問を受けます。私は、戦後、私学勤務二〇年の中で、日本の民主主義を考えたとき、その重要性を十分納得した上で、自己主張のない日本の社会における民主主義を否定した。つまり、このような状況の中で意志決定がなされると、個性とか創造性は死に、明日を開く先見性は失われてしまう。これではいけないのではないか、と考えた。たとえば床の間に違い棚がある。ここに何か一つ足りないものがあると感じて、庭の花を活けてみた。するとその空間が美しく生きてきた。何かに気づくのは、学問ではなく感性である。この空間をどう生かすか、という感性から花道が生まれた。

戦後、日本の大学は拡張につぐ拡張をし、しかも相も変わらず国立とか私立といった枠の中で、マスプロ化が進んでいた。これは少しおかしいのではないか、と気づいた私は、このことをまず上代先生に相談したのです。戦後の教育改革により専門学校が廃止になったので、いわゆる大学昇格運動が起こり、私も女子大学連盟をつくるなどの活動に携わって、津田、日本女子大、お茶の水などの女子大学の間を足しげく訪ねました。そのころ上代先生はクエーカーの信者になられたので、同信の関係から親しみを感じるようになったのです。

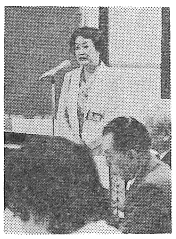
私は中学生の終り頃にクエーカーの信者になりました。その上、大学に勤めてからは、仕事を通して斎藤勇、南原繁、前田多門といった新渡戸博士門下の諸先生と知り合いになりました。上代先生もそのグループの中におられたのであります。人間が二人だけで相談したのでは話がまとまらない。そのとき、そこに神が入ることによって、三者が一つになることができます。そこから生まれた決定がわれわれに未来を考える勇気を与えるのです。クエーカーの信仰者として共鳴と同情をおぼえながら、上代先生とともに歩むことのできたことを、私は神に感謝しています。

私の抱いたセミナー・ハウスのビジョンに対して、日本の最高の知性と最高の良心が心からの賛成をして下さった。東大の総長室から一歩も出ないといわれた南原先生が、開館式で祝杯を高くあげて激励して下さり、共同セミナーのゲスト講演にも来て下さった。他の大学の講義には行かないけれども、セミナー・ハウスならといって、丸山真男先生などもこの丘で学生を指導して下さった。そして上代先生の勇気と誠実な知的エネルギーがセミナー・ハウスの創立に加えられたわけです。まさに私が心を傾けて仕事に打ち込めたのは、このような人間とのつながりと本当の出会いがあったからです。

私がセミナー・ハウスを創設するに当たって、大学の団体や協会に相談を持ち込むより、友愛の中での相互批判と相互信頼で問題を解決する新しい手段を強調したかったからです。裏切ることなく信じ合い学び合う友愛こそ、実は日本の民主主義を成長させる偉大な基盤なのだ、ということを私は叫びたいと思います。

（文責・編集者）

追悼セミナーを運営して
――上代先生と理想の炎――



日本女子大学教授

徳末　愛子

私共の敬愛する偉大な女性先覚者上代たの先生御他界後、早一年の時が流れて行った。しかし、若葉薫るここ多摩の丘で、先達も後輩も一つになって、平和を、婦人問題を、学問を、真剣に語り合われている熱気の中に身を置いていると、一度ともされた理想の炎は、様々に姿を変えて生き続けていることがひしひしと感じられる。

明治19年島根県に生まれたうら若い一人の女学生が、当時の不便な交通事情の中を三日がかりで上京し、目白の日本女子大成瀬仁蔵先生の門をたたかれた日は、何と不思議な日であったことか。それを機に、先生の中に眠っていた才能を開花させて下さる方がつぎつぎに現われたのである。浮田和民、新渡戸稲造、E・G・フィリップス、ジェーン・アダムス等等。先人の掲げた理想と情熱を一つずつ胸にたたみ込みながら、先生は次第に天与の使命にめざめられたのだと思う。

女子大の教壇上の先生は、学生の尊敬の的であると同時に、アメリカ仕込みの厳しさは恐怖の的でもあったが、どんな学生でも先生のお言葉のいくつかを大切に脳裏に刻んでいるのである。卒業生の一人は言う、「先生は人の心に消えない文字を書きのこされる方であった」と。

学長時代の先生は、新生日本の基盤となるべき大学教育に心血を注がれるかたわら、女性先覚者として世界の動きにも俊敏に対処しておられた。一例をあげれば、世界平和アピール七人委員会の中心的存在であられたことは誰の記憶にも新しい。人類の存続を脅かす危機に対して痩軀のすべてをかけて戦っておられるという感じであった。

教育の面では日本の大学が閉鎖的であることを深く憂えておられたところに、現名誉館長の飯田宗一郎氏が大学セミナー・ハウスという実にユニークな新構想を引っさげて飛び込んでこられたのである。一九五九年1月18日のことであった。それから六年後開館に至るまで設立発起人の先頭に立って、茅先生、大浜先生方と協力して陰に陽に飯田館長を支えて下さった。セミナー・ハウスこそ、大学に欠けているものを補うものとして、絶好の教育の場と考えられたからである。ハウスのモットー「思いは高く、生活は簡素に」は、先生の信念に合致するもので、この多摩丘陵での生活と学習から新しい力を得て、若人たちが巣立って行くのを、どれほど喜ばれたか解らない。また名誉館長をはじめハウスの方々も先生の何時も変わらぬ御協力に対して、八二歳の長寿祝いとして第六群中庭の池を「上代池」と命名して下さった。先生が親しくこの丘に歩を運ばれたのは、五年前の早春が最後となったが、「セミナー・ハウス・ニュース」は何時もていねいに読まれ、企画委員等でお手伝いする私共にも常に励ましの言葉やアドバイスをさずけて下さったことも、今は懐かしい思い出となってしまった。

この度の記念セミナーに参加して、講師の先生方のお話を伺い、セクション演習では若者のなまの声に接して、上代先生が畢生の悲願とされた人類永遠の平和の理念が、21世紀を担う人々の心に移し植えられてゆく有様を目のあたりにし得えたことに深く感謝したい。

吹け、緑の風よ、明日に語り継がれる熱き思いをこめて。

第123回大学共同セミナー

――故上代たの先生追悼記念――

主題＝平和・婦人・学問

――現代人へのメッセージ――

期日――昭和58年5月28～29日

〈発題――主題について――〉

Ⅰ 平和
東京大学教授　石田　雄氏

Ⅱ 婦人
日本女子大学教授
一番ヶ瀬康子氏

Ⅲ 学問
日本女子大学教授
福田陸太郎氏

〈セクション演習〉

A 国民の平和と国家の「安全保障」――「平和のため」の軍備とは？――
東京大学教授　石田　雄氏

B 現代の婦人問題と女子教育
日本女子大学教授
一番ヶ瀬康子氏

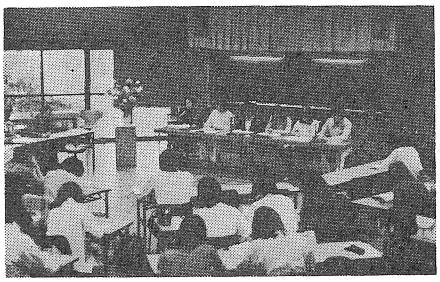
C 婦人解放運動の系譜――平塚らいてうと『青鞜』を中心に――
日本女子大学教授　熊坂敦子氏

D 現代詩の諸相
日本女子大学教授
福田陸太郎氏

E 地域研究と国際理解
筑波大学教授　井出義光氏

〈運営委員〉
日本女子大学教授　徳末愛子氏
日本女子大学教授　熊坂敦子氏

〈参加学生〉70名（内女子50名）
日本女子大（30）、ICU（4）、筑波大、明大、早大（各3）、都留文科大、学習院大、成蹊大、清泉女子大（各2）、東大、電通大、都立大、独協大、慶大、創価大、中大、津田塾大、帝京大、東京女子大、東洋大、明学大、芝浦工大、和光大、産能大（各1）、その他（4）



総括討論（講堂）

◇

故上代たの先生を追悼する記念セミナーの企画が、共同セミナー委員会で論議されたのは、昨年7月6日のことであった。開催時期は先生の一周忌との関連で、年間計画として組まれていた5月の一泊セミナーが当てられることになった。会期中に追悼記念会を組み入れて、故上代先生の人間像に触れ得るセミナーとすることを主眼に、昨年10月から具体的な準備に入った。

共同セミナー委員会からは、日本女子大学国文学科教授・熊坂敦子氏と、旧セミナー委員で故上代先生を通じて創設当初から関わりの深い日本女子大学英文学科教授・徳末愛子氏のお二人を運営委員に仰ぎ、企画・運営全般にわたって終始、ご尽力をいただいた。

テーマを設定するについては、故上代先生の全生涯を平和・婦人・学問の三つの主題に集約し、近代日本の黎明期の女性の心意気を偲びながら、そこに現われ出てくる現代的課題を究めるという趣旨で、副題には「現代人へのメッセージ」を選んだのである。

◇

第一日、中川館長による開講の挨拶に続き、徳末運営委員は次のようにセミナーの趣旨に触れながら挨拶された。昨年4月に他界された上代たの先生の多方面にわたる業績、とりわけ先生が情熱を捧げられた世界平和と女子教育の一端を辿りながら、現代に生きるわれわれに先生が何を語りかけているのか、各人の問題意識にかかわらせながら議論してほしい、と。

プログラムは石田雄、一番ヶ瀬康子、福田陸太郎の三氏の発題講演から始まる。上代たの先生の畢生の課題であった人類永遠の平和について、石田氏は社会科学者の立場から「国家の安全保障」という美名のもとに進められている軍備拡大が必ずしも「国民の安全と平和」にはつながらないと指摘され、「国民の平和」という視点から何が平和のために本当に役立つのか、社会科学的な分析の必要性を強調された。また、現代の婦人問題について一番ヶ瀬氏は、高齢化社会の進展のなかで女性は人間としていかに生きるべきか、という新しい価値観が求められていると問いかけられた（詳細はフロント・ページ参照）。続いて福田氏は、新渡戸稲造先生も研究しておられたトマス・カーライル、19世紀イギリスの大詩人ロバート・ブラウニング、リー・ハントらに関する論文や評伝を上代先生が書かれていること、とりわけ上代先生はブラウニングに関心を持ち『指輪と書物』をテキストに母校で研究会を開くなど造詣があったこと。また先生が遺贈された英書『ブラウニングの詩集』のなかには先生の息吹が伝わってくるような英語で書かれたまことに的確な書き込みが散見され、先生の語学力が卓越したものであったことなど詩を朗読しながら述懐された。

七十余名の参加者は三氏の講演から上代たのという偉大な人物の実践家・教育者・学者としての生き方に触れ、現代に生きる自分たち自身のあるべき姿に思いを馳せていた。

発題講演の後は、当日の夕食、翌日の朝食をはさんで七時間以上にわたるセクション演習がそれぞれ各セミナー室で行なわれた。「平和・婦人・学問」というテーマのもとに多岐にわたるセクションが組まれ、多角的に討議されたが、最終日の全体集会ではその演習の内容が各セクションのレポーターによって報告された。

Aセクションでは、平和を実現するための教育の役割は重要であるが、単に正しい知識を伝達するだけでなく「ものの見方」を習得させる教育が必要であること。Bセクションでは男女差別を解消するためには、女性は人間としての権利を主張するだけでなく、男女の枠を越えた人間としての生き方を人間解放の問題として考えていかなければならないこと。また、Cセクションでは平塚らいてうの自己確立の過程が辿られ、現代女性の生き方の指針となったこと。さらに、Dセクションでは、英米の現代詩を通して詩人は現状を先入観なしに捉える志向をもっているが、日常生活のなかでもこうした先入観なしにものを見るという詩人的なものの見方は一つのモデルになること。最後に、Eセクションでは地域研究という学際的な学問は、軍事目的に利用されたという経緯はあるが、国際的な理解を深めるための有効な学問であること、などが逐次報告された。

今回は、通常の二泊三日のセミナーと異なる一泊二日のショート・プログラムの初回ということもあり、全体として時間的なゆとりがなかったとの感想も寄せられたが、短時間に多くの人々と共通の問題を討論でき、有意義であったという感想も多く寄せられている。いずれにしても、現代の平和・婦人問題がいかに教育と密接にかかわっているか、教育の荒廃が叫ばれているなかで改めて教育とは何か、教育の本来の使命が問われたセミナーであった。また、別記のように上代先生の追悼会も同時に開催され、来賓の方々と共に先生を偲び、ゲストのメッセージを胸に刻むことができたことに併せて、当ハウス創立の情熱に触れ、教育施設としての役割と使命を覚醒させられるまたとない機会となった。

法人ニュース

第54回理事会・第35回評議員会

昭和58年5月27日
私学会館

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

〔出席者〕
〈理事〉中川秀恭、飯田宗一郎、平野龍一、楠川絢一、村山松雄、吉川孔敏
〈監事〉鈴木幸寿
〈評議員〉川原栄峰、板垣與一、岡宏子、川口弘、大東百合子、安藤良雄
委任状による者　理事一四名、評議員七一名　（敬称略）

＊

理事会・評議員会は中川理事長が議長となり、議事に入る。吉川専務理事より議案につき逐次提案説明があり、若干の質疑応答ののち、異議なく各案件を承認可決した。

▼役員人事案について
元文部事務次官村山松雄氏の理事就任。

▼評議員人事案について
学長交替等により、立正大学長中村瑞隆、白梅学園短期大学長田中未来、駒沢大学総長桜井秀雄の諸氏の新任。菅谷正貫、細谷俊夫、小尾扁雄、水野弘元の諸氏の退任。

▼協力会員校の脱退の件
専修大学、文教大学計二校の脱退。

▼昭和57年度事業報告案
▼昭和57年度決算報告案
具体的にはセミナー・ハウス・ニュース前号に掲載の『教育プログラム白書』、「業務白書」および別掲の「収支計算書」に大略記すとおりである。事業収入は若干減収となったが、極力支出の削減に努めた。

監事からは、「会計面は監査報告書のとおり適正に処理されている。業務面では一部会員校において会費の減額納入があるので善処されたい」との監査報告がなされた。審議の結果、当該会員校への要望等を含め、協力会員校会費については今後、検討していくことになった。

昭和58年度 第1回 国際プログラム委員会

昭和58年4月21日
私学会館

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

〔出席者〕中嶋嶺雄、広野良吉、山代昌希、菊地靖、熊田禎宣、庄野克房、杉山二郎、山沢逸平、マリオン・W・スティール（敬称略）

＊

今回は別記九名の委員が出席し、飯田名誉館長ほかハウスの関係者が陪席して開催された。

議事に先立ち中嶋委員長より、在外出張のために退任することになった横田洋三委員の後任に、マリオン・W・スティール氏（ICU助教授・近代日本史）がその残任期間、委員に委嘱された旨の報告があり、議事に入った。

まず、先の補充人事の報告をうけて、スティール氏が紹介され、昭和58年4月1日から59年3月31日までの期間、委員に就任することが承認された。

次に、広野副委員長より以下の提案が出された。今夏、行なわれるアメリカ五大学日本研究夏期講座（6月17日～7月30日、参加者約一五名）を引き受ける母体（sponsering organization）として、国際プログラム委員会および大学セミナー・ハウスの協力を得たい。具体的には学生の宿舎とセミナー室の提供、参加証（certificate of participation）の発行をお願いしたい、と考えている。

これについて、この種の協力要請は、当ハウスのアカデミックな活動とその実績が高く評価されての結果であるから、今後も大いに促進してはどうか、という意見が大半を占め、承認された。

次に、3月25、26日に開催された国際フォーラム「現代フィリピン社会の苦悩」について、運営委員の一人、菊地委員から実施報告

昭和57年度経常部収支計算書（57.4.1～58.3.31）

1．収支計算の部

収入の部 科目	金額（円）	支出の部 科目	金額（円）
基本財産運用収入	342,269	人件費	134,366,380
事業収入	150,113,651	法人諸費	1,990,658
宿舎収入	115,360,570	事務費	12,271,148
施設収入	24,095,490	土地建物費	20,358,846
食堂収入	10,657,591	事業費	66,064,238
施設改修協力金収入	9,023,700	一般事業費	20,517,948
協力会員校会費収入	58,400,000	学生指導セミナー	10,669,402
補助金等収入	15,239,000	普通セミナー	31,421,103
寄付金収入	954,012	国際プログラム	3,455,785
セミナー会費収入	3,644,200	固定資産取得支出	3,017,000
雑収入	9,077,564	未払金返済支出	3,331,472
繰入金収入	6,584,387	学生指導セミナー繰入金支出	2,792,400
積立預金取崩収入	8,065,000	災害復旧費	12,599,623
前期繰越収支差額	11,873,447	支出合計	256,791,765
収入合計	273,317,230	次期繰越収支差額	16,525,465

2．正味財産増減計算の部

増加の部 科目	金額（円）	減少の部 科目	金額（円）
資産増加額	3,017,000	資産減少額	29,433,652
負債減少額	11,396,472		
前期繰越増減差額	482,463,125	減少額合計	29,433,652
増加額合計	496,876,597	次期繰越増減差額	467,442,945

昭和58年度経常部収支予算書（58.4.1～59.3.31）

収入の部 科目	金額（円）	支出の部 科目	金額（円）
基本財産運用収入	350,000	人件費	132,750,000
事業収入	152,869,000	法人諸費	2,416,000
宿舎収入	119,057,000	事務費	18,793,000
施設収入	22,904,000	土地建物費	26,839,000
食堂収入	10,908,000	事業費	67,894,000
施設改修協力金収入	9,430,000	一般事業費	20,170,000
協力会員校会費収入	58,200,000	学生指導セミナー	10,183,000
補助金等収入	15,239,000	普通セミナー	33,991,000
学徒援護会	13,414,000	国際プログラム	3,550,000
日本国際教育協会	1,825,000	固定資産取得支出	8,150,000
寄付金収入	500,000	未払金返済支出	2,500,000
セミナー会費収入	3,592,000	学生指導セミナー繰入金支出	2,652,000
雑収入	6,540,000	予備費	5,000,000
千人会繰入金収入	3,452,000		
経常部繰入金収入	2,652,000		
積立預金取崩収入	14,170,000		
計	266,994,000	計	266,994,000
前期繰越収支差額	16,525,000	次期繰越収支差額	16,525,000
合計	283,519,000	合計	283,519,000

がなされた。参加者が少なかったことの原因として開催時期と参加経費の問題が出され、とくに主催者側でぜひ来てほしいと思う人には招待の形をとったほうがよい、という意見も二、三の委員から出された。

つづいて第10回国際学生セミナーの企画をめぐり活発な討論が行なわれた。第10回記念をプログラムにどう生かすかが焦点となり、過去九回の参加者に出席してもらえるようなレセプションの企画が提案され、経費や規模を考えながら、企画室が実現の可能性を検討することになった。

第10回のテーマ（副題）をめぐり、種々議論がなされ、前回の「日本再考」を受けて地域割に問題を深めていく、という視点から、「環太平洋の時代」を設定し、さらに運営委員会で議論をつめることになった。四人の運営委員のメンバーとして候補者五名を選出し、内四名の人選は企画室が交渉に当たることになった。

◈千人会……昭和58年2～5月

◇現在会員は一、六七五名です

大学人＝一、二五四名
社会人＝　四二一名

◇新しく会員となられた方々

六名〔第68回報告（申込順）〕

B　大学セミナー・ハウス
　　専務理事　吉川　孔敏殿
B　創価大学教授　中西　治殿
B　LAC建築デザイン代表
　　小林　弘政殿
C　主婦　鈴木　千歳殿
B　日本ルーテル神学大学
　　中村　克孝殿
C　開倫塾塾長　林　明夫殿

◇会費ありがとうございます

永島孝、小俣武夫、山田昭房、玉野井芳郎、永積昭、山崎俊雄、谷資信、板橋並治、金子ハルオ、石井正博、平岡勇、仙田哲、岩佐凱実、木村康雄、伊藤千秋、中島力、遠藤平治、土屋金彌、丹下みさ子、山口俊夫、本谷勲、清水畏三、大頭仁、岡田純一、公文俊平、牧野誠一、松島千代野、久保田きぬ子、喜多村得也、江幡玲子、田辺留次郎、吉田耕作、大岡信、岡村勝、板垣雄三、萩原玉味、島田依史子、箕輪成男、勢山秀子、今井裕之、斎藤眞、中岡二郎、井原恵治、守永誠治、京極純一、小泉仰、窪田庄十郎、近藤圭一、示村悦二郎、原正彦、山田圭一、田上穣治、三神勲、秋間実、昌谷春海、吉田公保、寺東寛治、野沢晨、関口晃、池川郁子、熊澤義宣、高橋和之、崎野滋樹、森昭彦、矢田俊文、佐藤百世、西村章子、遠藤卓夫、島美喜子、松井賚夫、笠耐、磯直道、馬越徹、高橋潤二郎、吉川孔敏、東洋、門脇卓爾、彦由一太、西田貴子、花井増實、中村妙子、梅村魁、若林玄修、高階秀爾、福永寿巳夫、玉川一郎、増沢利幸、勝見允行、那須宗一、石原忠男、杉山逸男、宮腰賢、玉田啓八、人見宏、村松林太郎、一松信、五唐勝、西川恭治、永野賢、高橋誠、肥前栄一、平野鉄太郎、林潔、土井恵美子、寺中良二、最上武雄、白川和雄、市川邦彦、石堂常世、鴨澤巌、久保亮五、細井勉、松尾弘、前島郁雄、斉藤恵彦、麻島昭一、寺内礼治郎、大西清、平野由紀子、中田良平、柘植敏治、富塚文太郎、村井実、島田治夫、山澤逸平、太田淳一、小山五郎、増田武男、山田良之助、工藤英明、渋谷光世、石坂巌、小幡史朗、佐野厚子、大村晴雄、加藤六美、岡村総吾、藤木宏幸、向坊隆、高瀬文志郎、島田外志夫、池田義人、池原義郎、市川孝生、尾田綾子、手塚喬介、有賀弘、望月清司、大畑篤四郎、鈴木友二、小原啓義、佐藤毅、柴田泰比古、村田晴夫、護雅夫、丸山眞男、安藤英治、萩原稔、熊坂敦子、中島直忠、富岡幸雄、中村孝之、福西基、木田宏、菊地昌典、瀬部孝、大田末穂、石渡毅、渡利千波、天野一夫、木村尚三郎、佐藤慶幸、進藤トク、野田倬、斎藤幸一郎、佐藤和男、一丸節夫、大塚正夫、村上千賀子、高村弘毅、芳山邦弘、三上次男、田所光子、栗原俊記、中島康孝、佐藤公孝、小泉文夫、舘逸雄、豊田陽子、原一雄、飯田修一、春田素夫、栗本弘、村山松雄、林邦夫、竹村研一、久保田浩、福田一郎、柳下勇、中鉢正美、井上繁、染谷恭次郎、小谷正雄、豊嶋廣司、村上正夫、谷口汎邦、堤彪、武藤富男、龍池隆、高峯一愚、吉沢四郎、二宮永蔵、山崎邦彦、石弘光、海老根宏、矢野洋四郎、小島蓉子、佐藤進、中西治、江渕浩美、大槻盛一、関口富左、大泉充郎、木村建一、安藤賢一、下森定、勝田有恒、山崎誠、山元洋、清永昭次、関根隆光、熊田陽一郎、水野弘文、蓮見音彦、羽田三郎、仁科雄一郎、村田喜代治、小原清成、佐伯彰一、下出積與、鵜川馨、竹内昭夫、工藤康雄、桐生冨久、塩田庄兵衛、伊倉退蔵、前田愛、横山勝信、原豊、森田桐郎、小林弘政、井上宇市、絹川正吉、今井清一、佐藤經明、青木清明、加藤秀俊、藤井弥太郎、高木健太郎、鈴木達雄、杉浦明、小林弘、冨山芳正、向山文雄、金子六郎、上村学、扇谷尚、北野弘久、鈴木千歳、大川郁子、中村英雄、正田亘、川口弘、木原太郎、桜井育子、古西信夫、山本澄子、内田祥哉、椿弘次、滋賀秀三、近藤裕、鈴木悌二、土橋信男、矢澤大二、矢島康彦、野間三郎、大村晴雄、荒井献、梅沢文輔、峰岸純夫、伊藤意智郎、小泉一郎、本吉修二、羽田新、赤攝也、今井栄、小林保彦、内田市五郎、芳野赳夫、井上百合子、加藤晴久、内山力、崎田直次、岡田己代次、平野文彦、天城勲、山本幹夫、百瀬宏、原治、伊藤喜栄、本明寛、加藤一郎、阪本泉、児玉昭太郎、芳賀徹、安藤利亮、大原栄一、太田正孝、長谷川幸男、中川作一、芹沢栄、狩野紀昭、後藤捨男、木村建二郎、細谷千博、今井義夫、野見山不二、角田稔、深海博明、奥山典生、奥野忠一、天野熊男、大塚久雄、柴田勇造、山之内靖、内藤博、福田雄、朝野洋一、荒井基、徳末愛子、林澤島侑子、小俣喜久治殿、明夫、西川大二郎、吉田光孝、栗田見瑞　（敬称略）

●寄付金報告

58年2～5月

△教育プログラム資金▽

三、〇〇〇円　第一二二回大学共同セミナー社会人参加者（4名）殿
二〇、五三四円　第一二二回大学共同セミナー参加者一同殿
一〇、〇〇〇円　第一二三回大学共同セミナー社会人参加者一同殿
一五、一〇六円　第一二三回大学共同セミナー参加学生一同殿

△一般寄付金▽

二六、九五〇円　慶応義塾大学西川研究会殿

△植樹資金▽

五、〇〇〇円　横浜商科大学平野ゼミ殿
一六、〇〇〇　東京大学見田ゼミ朱の会殿
三五、〇〇〇　東京薬科大学新歓祭実行委員会殿
一〇、〇〇〇円　学習院大学教授小泉一郎殿
八、五〇〇円　小俣喜久治殿
五、〇〇〇円　日本女子大学図書館殿
一〇、〇〇〇円　桜楓会事務長牛頭栄子殿
三〇、〇〇〇円　文教大学女子短期大学部英語英文学科殿
三四、四〇〇円　杏林大学保健学部フレッシュマン・セミナー殿

△現物寄付▽

ケヤキ三本　東海大学医学部代表佐々木正五殿

●事業部だより

58年4・5月

―青葉若葉のキャンパスから―

●4・5両月の概況

新年度4・5両月は、本格的な新入生合宿のシーズンである。4月から7月にかけて実施される各大学の新入生オリエンテーションの大半が、この二ヵ月に集中している。今春は早くも4月2日に東京薬科大の新入生歓迎キャンプを迎え、これまでで最も早い〝フレッシュマンの季節〟の幕開けとなった。以後、ほとんど連日のように各大学の学部、学科ないしクラス単位の新入生合宿が、新緑のこの丘に展開された。

両月の利用状況は11・12ページに示すとおりであるが、これを数字で示すと、4月はグループ数九〇、宿泊延人数六、八三〇人（宿舎利用率八四％）で、これは4月の最多記録である。一方、5月はグループ数九三、宿泊延人数五、九一〇人（同利用率七一％）で、これも同月の最多記録の更新である。

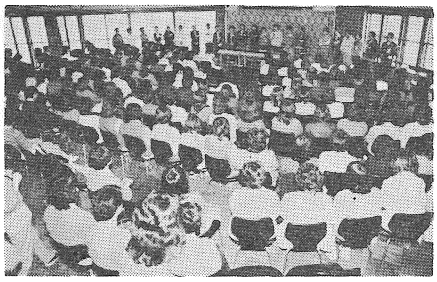
両月中に実施された新入生合宿関係の利用は、計二九校、四九件、六、五四一人（うち教職員五三五名）、延べ七、六二四人。これは両月の総延人数の六〇％に当たる。なお、大学関係の新入生セミナーでクラス単位以上の合宿の実施状況は別表のとおりである。

●新入生合宿、両月の話題から

今春もフレッシュマン合宿の皮切りは、前記のとおり、東京薬科大である。例年同様入学式以前に、実行委員を中心とする在校生の見事な自主運営で新入生を歓迎、教師を囲んでの小グループ懇談や「寸劇による東薬の一年間」など多彩な交流プログラムの中で新入生の大学生活への導入を助けた。4月最初の週末を利用しての二泊三日の合宿である。

医科系の大学が、今年も入学式直後あるいは4月の早い時期に、いずれも二泊三日のオリエンテーションを実施している。東海大の医学部と医療技術短大、そして杏林大の医学部と保健学部の四グループである。東海大は八年目、杏林大は昨年に続いて二年目であるが、前者は佐々木医学部長、五島病院長らを中心に教職員や在校生が一体となり、後者は松田理事長、山本学長らも来館するなど、「医の道」を選んだ若者の自覚を求めて、ともに全学的な熱の入れようであった。

この丘での開催が連続の一〇年以上、すでに伝統的行事となっているオリエンテーションが少なくない。日本女子大社会福祉学科、武蔵工大電子通信工学科、東京学芸大諸学科、文京女子短大英語英文学科、都立立川短大などである。早大の建築学科と電子工学科は数年ぶりの復活。今年初めて実施された大学は、白百合女子大仏文学科、玉川大工学部の四学科、日大芸術学部放送学科と農獣医学部拓植学科、そして今年から会員校の仲間入りをされた東京電機大の電子工学科などである。



新入生の前で自己紹介をする教職員たち
――東海大医療技術短大（講堂）

4・5両月中に行なわれた新入生合宿で最大のものは、単一グループでは津田塾大国際関係学科の〝フレッシュマン・キャンプ〟で、教職員を含めて三〇〇名の全館使用。昨年同様二日目には大東学長を迎え、食堂いっぱいに繰り広げられた昼食大パーティで同キャンプを締めくくった。二回に分けて実施したものでは、玉川大工学部四学科の計四七五名、文京女子短大英語英文学科の計四六二名、また延人数で最大のものは東海大医療技術短大（二泊）の延べ四〇四名である。なお、両月の新入生セミナー四九件のうち一〇〇名以上の規模の合宿は二八を数える。

大学の枠をこえて新入生を暖かく迎える光景も見られた。〝黄金連休〟前夜の4月28日、夕食時の食堂（七グループ二〇〇名）では、東京農工大の新入生グループが大きな拍手で紹介され、また、翌29日に開催された遠来荘の茶道教室でも、地元の奉仕者たちから歓待を受けた。また、5月4日夜の食堂（六グループ二五〇名）では、武蔵工大の新入生グループを歓迎して、千人会員の福田一郎東京女大教授がメッセージを述べられ、学習院大シェイクスピア劇研究会の有志も練習中の劇の一景を披露した。

東海大医学部の新入生一行が今年もケヤキの苗木三株を記念に植樹された。杏林大保健学部の一行も杏（アンズ）など四株を、文教女子短大の英語英文学科もハナミズキ二株を、それぞれ新入生合宿の記念として植えて下さった。

●新入生合宿紹介

本号の「わたしたちの合宿」紹介欄（10ページ）には、4・5両月に行なわれた新入生セミナーの中から、ともにこの丘の定例行事

昭和58年4・5月
新入生オリエンテーション実施状況

大学名	参加者数
●4月	
東京薬科大（新入生歓迎キャンプ）	＊188（ —）
東海大・医療技術短大	＊204（26）
白百合女子大・仏文学科	126（ 5）
立教大・観光学科	140（12）
日本大・放送学科（新入生歓迎会）	204（ 2）
杏林大・医学部	＊114（ 9）
工学院大学・工業化学科	139（22）
横浜国大・教育学部	62（10）
日本女子大・社会福祉学科	123（10）
東海大・医学部	＊173（18）
玉川大・情報通信学科，経営工学科	216（14）
玉川大・機械工学科，電子工学科	259（15）
杏林大・保健学部	＊121（ 6）
東京学芸大・幼稚園教育	36（ 5）
早稲田大・建築学科	244（12）
東京電機大・電子工学科	209（ 6）
電気通信大・材料科学科	59（ 4）
中央大・教育学専攻	73（ 6）
東京農工大・農業工学科	36（ 7）
●5月	
学習院大・学生相談所	46（ 5）
電気通信大・電子情報学科	67（ 9）
武蔵工業大・電子通信工学科	154（14）
東京都立工科短大・機械工学科	33（ 9）
東京都立工科短大・精密機械学科	39（ 6）
東京学芸大・理科教育教室	18（ 2）
東京学芸大・化学教室	48（ 4）
東京学芸大・物理学教室	37（ 4）
中央大・「心理学」会	49（ —）
東京都立立川短大	118（24）
東京都立商科短大・商学科	148（16）
東京都立商科短大・商学科	148（16）
津田塾大・国際関係学科	300（30）
東京都立商科短大・商学科Ⅱ部	58（10）
東京都立商科短大・経営学科	90（15）
東京学芸大・生物学教室	57（ 6）
日本大・拓植学科	230（17）
文京女子短大・英語英文学科	232（11）
文京女子短大・英語英文学科	230（11）
文教大学女子短大部・英語英文学科	＊191（14）
東京学芸大・数学科	178（10）
早稲田大・電気工学科	233（14）
東京都立大・数学科	72（11）
東京都立大・物理学科	67（ 6）
職業訓練大学校	241（52）
計　44グループ	5,569人（453人）

（注）専修学校・各種学校を除く。参加者数の（ ）内は内数で教職員。＊は2泊，他は1泊。実施順。

となっている二つのグループにご登場願った。

一つは、一昨年準会員校として加盟され、ハウスとのご縁をいっそう深めて下さった文京女子短大の英語英文学科で、昭和46年以来一三年連続開催の〝八王子セミナー〟。毎年特定の研究題目を掲げ、ゲスト講師（ここ数年は作家・山本茂実氏）を招き、その講演を軸にクラス別の討論を展開する。学生部長の小河織衣教授にご紹介いただいた。

もう一つは、武蔵工大電子通信工学科の新入生歓迎セミナーで、この合宿も42年以来一七年目の伝統的な行事である。教員と上級生の共同の企画と運営で実施されることがこの合宿の特色であり、さらにハウスへの往路と帰路に、見学やスポーツのプログラムが組まれているのも、ユニークな点である。今年度の担当者である片岡徳昌講師にご紹介をお願いした。

◆わたしたちの合宿◆その一

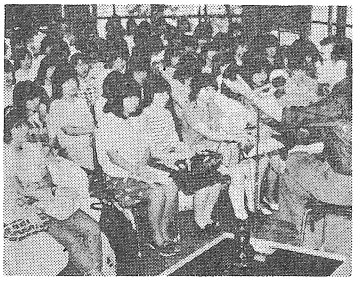
広い空と高邁な精神

――私たちに欠けているもの――

文京女子短期大学英語英文学科教授・学生部長
小河織衣

文京女子短期大学の英語英文学科が、一年生対象の年間行事として大学セミナー・ハウスを利用させていただいてからすでに一三年になる。第一の目的は新入生と担任の教師とのクラス別ミーティングで、一泊の共同生活のなかに教師と学生がおたがいに未知な部分を発見する喜びを分かちあうことにあり、第二の目的は講師の先生をお招きして講演を聞き、夜のミーティングでそのテーマを中心に討論し、大学生ならではのゼミのよさを新入生に味わわせることにある。セミナー・ハウスに参加して深い感銘をうけたのは5月の青葉に照り輝やく広い空と、食堂の壁に大きくかかげられた「Plain Living and High Thinking」（簡素な生活、高き思想）という文字であった。セミナー・ハウスのこの精神は私が学生に特に望むところであった。不便さを体験することは学生にとって何よりの賜物であり、日ごろ忘れていた新鮮な大気と、高邁な精神を学生の各自が受けとることは大学生としての新たな自覚を促す何よりの贈物である。

今年度のテーマは「飢餓と飽食のはざま――われらいかにして生くべきか――」であったが、私は学生がこのテーマを社会問題、国際問題としてとらえ、各自が大学生らしい意見をのべることができるように、立派に成長してほしいと期待してやまないのである。



「あゝ野麦峠」の作者・山本茂実氏の講演に聴き入る新入生たち（講堂）

◆わたしたちの合宿◆その二

一七回目を迎えた電子通信工学科の新歓セミナー

武蔵工業大学講師
片岡徳昌

武蔵工業大学電子通信工学科では、昭和42年から毎年5月に、一泊二日の日程で新入生歓迎セミナーを行なってきた。新入生・上級生・教員とが寝食を共にして、大学生活の意味を探究するこのセミナーは、教員と学生との繋がりを築く場として定着し、本学科の伝統的な行事となった。

今回は電気通信科学館を見学後、セミナー・ハウスで一一グループに分かれて、「大学生活はいかにあるべきか」をテーマに話し合った。翌日はフィールドアスレチックで汗を流し、相互に交流し合うよい機会となった。また、ハウスの配慮による、他の宿泊グループとの交歓会も、新入生にとっては大変有意義であったと思う。

公正・自由・自治を建学の精神としている本学では、この新歓セミナーを一年次生の担任が計画し、学生が自主的に運営、実施してきた。実施に当たって、その最大の特色は上級生が兄弟のように新入生の面倒を見ていることである。特に夜のセミナーでは、勉学の仕方や課外活動の大切さ、大学生活のあり方などについて、上級生から話を聞くことによって、まだ大学生活に慣れず精神的に不安定な時期にある新入生の心も和んで、親密感を増すようである。これが契機となって、自己の目的に向かって邁進できる態勢が整うように思われる。その意味からも、上級生の参加は欠かすことのできない必要条件である。

実施前にかれらは積極的に協議会を開き、ディスカッションを行ない、見学先の解説書等を入手して全員に配布し説明するなど、周到な準備をしている。「通信科ファミリー」の意識は、このような絆から芽ばえ発展していくものと思われる。このように新入生の指導上、有益で且つ学生にも好評な本学科の行事は、大学にも認められ、三年前から全学科が同様の行事を行なうようになっている。

上級生・教職員も加わって記念撮影（本館前広場）

武蔵工大新入生歓迎セミナー実施概要

▶5月4日（水）

11：20	大学出発：バス3台分乗，車中昼食
12：35	電気通信科学館（大手町）見学（約1時間）
15：45	大学セミナー・ハウス到着
15：50	井出正男主任教授挨拶，オリエンテーション。映画「LSI・超LSIの世界」「武蔵工大50周年記念」。参加教員・上級生紹介，セミナー運営説明（通工会）
18：00	夕食（他大学グループとの交歓）
19：00	グループ別集会：新入生，上級生，教員が11班に分かれて懇談（約2時間）
21：00	自由懇談会，教員は，運営・進行確認の集会
23：00	就寝

▶5月5日（木）

7：00	起床，宿舎清掃
8：00	朝食
8：50	全体集会：各グループ代表の報告，教員の助言
10：00	当日の団体行動説明（通工会）
10：30	記念撮影の後セミナー・ハウス出発：徒歩で北野駅へ（約30分）
12：50	よみうりランド入口集合，昼食
13：40	フィールド・アスレチック開始
15：30	記念撮影の後現地解散

参加人員

学生：1年次生112，2年次生7，3年次生14，4年次生3，院生(修)2，計138名

教職員：教員13名，学生課員1名

ハウスの建物を体験して

早稲田大学建築学科一年 佐藤淳哉

いろは坂を上ると、そこには巨大な楔が打ち込まれている。青々とした緑の中に、それはコンクリートの地肌を見せてそびえている。強烈な印象である。重力を無視しているかのようなコンクリートの楔が、その辺のビルより倒れそうもないように見えるのは、僕だけだろうか。

構内を廻ってみる。どの建物も自然の中に建っている。真っ平らに造成した住宅地とは違う。それだけで胸が踊る。

翌日、もう一度それぞれの建物を見る。曲線が基調のものが多い。真四角な立方体のビルより、安心して見ていられる。やはり自然には曲線が合う。

ハウス周辺の〝歴史散歩〟のすすめ

八王子は歴史の古いまち。ハウスの周辺にも名所や旧跡が少なくない。構外へ少し散策の歩をのばせば、「絹の道」の名のとおり、昔、織物業をなりわいとした部落の名残りなどもしのぶことができる。学習での頭脳の疲れをいやすよすがに、一時をさき、多摩の丘に〝歴史と民俗〟をたずねての散策も一興であろう。

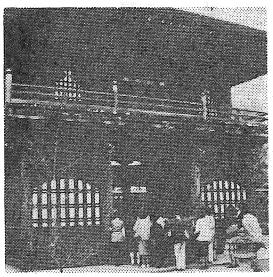
春休み明け直前の4月上旬、千葉大経済学部の野沢敏治助教授と男女学生七名が、二泊三日のゼミ合宿の中日に、そのような〝散策〟を試みようとしていた。そこに、偶然というにはあまりにも幸運に、郷土の歴史を学ぼうという地元八王子のご婦人方約二〇〇名の一行が、史跡めぐりの途上、ハウスでの昼食と見学のために到着。食堂では、一行の講師・小泉栄一氏（構内の民家「遠来荘」の寄贈者・勇二氏の実兄）から、「絹の道」など、午後からの見学ルートにちなんだ、願ってもない興味溢れる解説を傍聴する機会にも恵まれた。以下は、地元の一行と行動を共にした野沢ゼミによる〝歴史散歩〟の報告である。

ゼミの合間に
絹の道に遊ぶ

千葉大学助教授
野沢　敏治

これはいい機会だとおもい、私たちは〝歴史散歩〟の会に便乗させていただいた。前日から鶴見良行氏の『バナナと日本人』をテキストにして、学生と勉強してきたのであるが、途中で近くの「絹の道」を散策する予定であった。だから、セミナー・ハウスに偶然立ち寄ったレディース・カレッジの御婦人方と行動を共にしては、というハウス職員の方のすすめに喜んで従うことにした。主催者は八王子西ロータリークラブであった。

最初に永林寺という禅寺にはいった。ゆるやかな斜面に清浄なたたずまいをみせる伽藍。本堂の欄間に浮き彫りされた菩薩像は天平的なおおらかさを放っていた。楽の音を奏でているとおもわれるそれらの群像に、しばし、私どもは見とれた。天井を見あげると数十もの花鳥の図が色鮮やかに描かれている。少し色あせてはいるが、板戸にも色彩画の跡がうかがわれる。美術品の形で昔の富の蓄積がここにはある。薄暗い本堂を出て明るい縁側にまわった。そしてそこで甘茶をいただいた。今日は4月8日である。私はこれまで甘茶の甘味が砂糖を全然使わずに、草を煎じただけでできるものとは知らなかった。学生も知らなかったようである。自然と香りでてくる甘味に清められながら私たちは永林寺をあとにした。


永林寺の山門で

この付近は多摩丘陵地帯。鳥のさえずりとともに眼をさますほどの静閑さであるが、しかしここにも東京方面からのニュー・タウン群がしのび寄ってきている。広い面積を占めるセミナー・ハウスの一帯だけが緑の孤島になる日がくるのだろうか。バスは次の目的地、小泉家屋敷にむかった。

家主の小泉老は「絹の道」の由来について語ってくれたが、その話は私が大学院時代に知った色川大吉氏の仕事をおもいおこさせた。「絹の道」というロマンチックな呼び名の背景で、鑓水の豪農や豪商は日本の近代化にどんな役割をはたしたのであろうか。わが国における市民社会的なものの芽がそこにどう出ているのだろうか。そんなことも聞きとりたいなあと考えながら、庭に咲く野草のあれこれについてのまことに知識豊かな、そしてそれらを説明するときの老のうれしそうな横顔を見ていた。除草剤を使用しないから虫の穴だらけの庭、今でもマキで炊いているかまど、今は使用していないがかつてのままである二階の養蚕室。ワラブキ屋根のこの民家はもう確実に歴史的遺物となっている。民具の博物館にもなりうる小泉家を出て、私たちは最終目的地の「絹の道」にむかった。そして旧中仙道に似たその道にとりかかったところで、私たちはレディース・カレッジの方々と別れた。偶然の機会にめぐりあえ、旅人的な気安さを十分に味わいつつ、私たちは歩いてセミナー・ハウスに戻った。

史跡巡りに関する資料の用意があります。フロントにお問い合わせ下さい。
――事業部

●利用状況

＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用
日帰り利用者を除く

■4月

（90グループ、延六、八三〇人）

東京学芸大学助教授　山田　有策
早稲田大学教授　鴨　武彦
順天堂大学セツルメント無医地区活動班
杉野女子大短大教授　田村　皖司
青山学院大学教授　深沢　実
青山学院大学教授　大谷登士雄
青山学院大学教授　小林　保彦
東海大学教授　鈴木　守
駒沢大学助教授　谷敷　正光
駒沢大学教授　杉浦　智紹
明治大学教授　西野　万里
東京薬科大学新入生歓迎キャンプ
東京薬科大学剣道部　佐藤誠三郎
東京大学教授　岡田　信弘
明治学院大学講師　中西　進
成城大学教授　稲垣冨士男
青山学院大学教授
東海大学医療技術短期大学新入生オリエンテーション　十代田知三
芝浦工業大学教授　寺田　由永
明治大学教授　坂入　明
東京家政大学助教授　設楽　正雄
明治大学教授　野沢　敏治
千葉大学助教授　水野　節夫
法政大学助教授
立教大学観光学科新入生オリエンテーション　羽田　三郎
青山学院大学教授　土方　正夫
早稲田大学講師
学習院大学コンピュータ研究会　肥後　和夫
成蹊大学教授　石山　伍夫
日本大学教授　山住　正己
東京都立大学教授　吉田　靖彦
青山学院大学教授
日本大学芸術学部放送学科新入生歓迎会
杏林大学新入学生宿泊セミナー
工学院大学工業化学科新入生オリエンテーション
明治学院大学教授　秋山　智久
成蹊大学教授　宇野　重昭
東京大学教養学科合宿
工学院大学溶接塑性加工研究室
横浜国立大学教育学部新入生合宿
日本女子大学社会福祉学科新入生オリエンテーション
東海大学医学部新入生研修会
杏林大学保健学部フレッシュマンセミナー
東京学芸大学幼稚園教育オリエンテーション　大久保治男
駒沢大学教授
早稲田大学建築学科新入生オリエンテーション
早稲田大学建築学科松崎研究室
東京電機大学電子工学科一年生オリエンテーション
電気通信大学材料科学科新入生合宿研修
工学院大学助教授　須田精二郎
中央大学文学部教育学専攻新入生合宿オリエンテーション
東京農工大学農業工学科合宿オリエンテーション
日本女子大学被服学科履修オリエンテーション
早稲田大学基督教青年会
日本大学教授　菊池　敏夫
芝浦工業大学電子計算機研究会
白百合女子大学仏文学科新入生オリエンテーション・キャンプ
都留文科大学助教授　三井須美子
横浜市立大学教授　柳下　勇
高千穂商科大学梶原第二ゼミ
神奈川大学講師　中西　治

玉川大学工学部新入生教育＊
桜美林大学OACUリーダースキャンプ
産業能率大学助教授　山田　善靖
東京コンピュータ学院新入生オリエンテーション＊
和光高等学校ブラスバンドOB会
高津看護専門学校
八王子レクリエーション学園
すみれ幼稚園
ICYE委員会
日本電気府中事業場
雪印物産
市光工業
川鉄物産
アスター精機
アイワールド＊
積水化学工業東京ハイム営業所
富士ゼロックスオフィスサプライ＊
スーパーアルプス
三菱総合研究所
光印刷
日本トラベノール
エムエス計算センター
日建工学
日電アネルバ
〔個人利用〕
法政大学総長　中村　哲

■5月
（93グループ、延五、九一〇人）
産業能率短期大学留学生合宿研修
東京大学教授　森田　桐郎
青山学院大学教授　原　豊
学習院大学学生相談所新入生歓迎オリエンテーション
早稲田大学L・E・I
明治大学ジャーナル倶楽部
青山学院大学青山キリスト教学生会
電気通信大学電子情報学科新入生研修
日本大学教授　北野　弘久
明星大学教職員研修
東京女子大学教授　福田　一郎
中央大学教授　山下　幸夫
中央大学考古学研究会
武蔵工業大学電子通信工学科新入生歓迎セミナー
学習院大学英米文学科シェイクスピア劇研究会
横浜国立大学教授　佐藤　精一
芝浦工業大学教授　高橋　清
中央大学教授　林　昇一
立教大学助教授　小林　晃
東洋大学教授　島袋　嘉昌
東京学芸大学理科教育教室新入生合宿研修
東京学芸大学化学教室新入生合宿研修
東京学芸大学物理学教室新入生合宿研修
中央大学経済学会
中央大学「心理学」会新入生歓迎合宿
慶応義塾大学教授　松本　憲
立教大学教授　三戸　公
東京農工大学教授　金子　六郎
津田塾大学国際関係学科フレッシュマン・キャンプ
国際基督教大学ステューデント・セミナー
東京学芸大学生物学教室新入生合宿研修
一橋大学教授　山澤　逸平
日本大学拓植学科一年次研修
東京都立大学教授　馬場　宣良
学習院大学教授　河野　豊弘
文京女子短期大学英語英文学科新入生セミナー＊
東京経済大学教授　富塚文太郎
駒沢大学講師　羽鳥　茂
明治大学教授　松瀬　貢規
法政大学教授　下森　定
日本大学教授　三浦　一
慶応義塾大学講師　森　康彦
東京学芸大学数学科新入生合宿
明治大学教授　横田　澄司
駒沢大学助教授　谷敷　正光
東海大学教授　師岡　孝次
千葉商科大学教授　野村　隆夫
慶応義塾大学教授　鳥居　泰彦
明治学院大学教授　宮野　彬
東京理科大学教授　富沢　稔
立正大学助教授　野宮　賢
立正大学教授　杉澤　新一
早稲田大学電気工学科新入生オリエンテーション
東京都立大学教授　荻上　紘一
千葉大学伊東・武蔵ゼミ
東京都立大学物理学科新入生オリエンテーション
明治学院大学教授　竹内　真一
東京都立工科短期大学機械工学科学外研修
東京都立工科短期大学精密機械学科学外研修
東京都立立川短期大学新入生歓迎セミナー
東京都立商科短期大学商学科新入生オリエンテーション＊
東京都立商科短期大学商学科Ⅱ部新入生オリエンテーション
東京都立商科短期大学経営学科新入生八王子オリエンテーション
阿佐ヶ谷美術専門学校
文教大学女子短大英文学科フレッシュメン・セミナー
職業訓練大学校新入生セミナー
日本国際学生協会
第123回大学共同セミナー
高橋聖書研究会
久遠キリスト教会青年会
仮説実験授業研究会
八王子市公立小学校長会指導部
文部省・東京ドイツ文化センター
千葉市教育委員会
富士ゼロックスオフィスサプライ
第一弘報社
アイワールド＊
日本フードサービスチェーン協会
東芝府中工場
京王百貨店
日建工学
ウェラ化粧品ファインコスメティック
味の素
ベスト
プレス工業
〔個人利用〕
日本女子体育大教授　河田　喬夫
芝浦工業大学教授　十代田知三
東洋大学教授　堀　光男
東京女子大学学生　服部　好江
上智大学大学院生　福島　範昌

予告

▼**第10回記念国際学生セミナー**
主題　発展と平和のモデルを求めて――環太平洋の課題――
期日　昭和58年10月28～30日
＜ゲスト講演＞
京都大学教授　高坂正堯氏
＜セクション演習＞
Aアジア・太平洋の安全保障関係（渡辺昭夫氏）／B環太平洋経済協力（山澤逸平氏）／C人物交流と文化交流（浜西栄一氏・阿部美哉氏）／D開発と技術協力（神谷弘司氏・鈴木信一氏）／E環太平洋諸島住民の伝統文化とその変容（青柳真智子氏・高山純氏）
＜運営委員長＞
早稲田大学教授　菊地　靖氏

▼**第6回大学合同セミナー**
主題　近代の経済および経営思想の生成――イギリス・アメリカ・日本の事例を中心に――
期日　昭和58年11月11～13日
＜指導教授＞
長幸男（東京外大）、田村光三（明大）、寿永欣三郎（国学院大）、山下幸夫（中央大）、岡山礼子（明大短期大）の諸氏

▼**第124回大学共同セミナー**
主題　芸術のたのしみ（第5回）――バロック概念の再検討――
期日　昭和58年11月25～27日
＜運営委員＞
お茶の水女子大教授　徳丸吉彦氏
共立女子大学教授　友部　直氏

▼**第20回大学教員懇談会**
主題　時代の変遷に伴う大学の将来像
期日　昭和58年10月8～9日
＜発題講演＞
これからの大学教育はいかにあるべきか
日経新聞論説委員　黒羽亮一氏
文部省大学課長　坂元弘直氏
＜パネル発題者＞
木内信敬（東洋女子短大）、示村悦二郎（早大）、石川光男（ICU）、関口研日麿（慶大）の諸氏。

●**編集後記**

本号は故上代たの先生追悼記念号とした。新緑の多摩の丘で催された追悼の集いは、編集子にとって、ハウス創草期の熱情を新たな視点で感得する機会であった。創設の原動力として女性の参画があった。この一点に、追悼記念セミナーのテーマである「平和・婦人・学問」を重ね合わせながら、ハウスの目的と使命を考えた。

上代先生は、ご生前、いつも『ニュース』を読んでいますよ、とおっしゃって下さった。その一人の読者を失って早や一年余である。（能）